

12月16日 パネルディスカッション

テーマ 「日本学における教育・研究の国際協力の可能性について」

パネリスト：

李徳奉、趙順文、朴晋雨、郭連友、ダヴィッド・ラブス、ティモン・スクリーチ、森山新、小風秀雅

小風：それでは、2日目午前中のパネルディスカッションを始めたいと思います。

パネルディスカッションのテーマは、今回、大学院教育イニシアティブで昨年度と今年度国際ジョイントゼミを実施した効果、あるいは反省点について、先生方のご意見をいただき、今回の経験をふまえて、今後どのような形で研究教育の国際教育を進めていったら良いのかということについて、議論したいということで企画いたしました。元々こういう公開のセッションという予定ではなかったのですが、ジョイントゼミに参加された学生さん、あるいは今回のコンソーシアムに参加した学生さんの意見も取り入れたいということで、こういう公開の形にしました。

それでは、一応大体三つのポイントにしたがってお話を進めていきたいと思います。一つは今回のジョイントゼミを実施してみて、その効果、あるいは反省点についてご意見を伺いたいと思います。それから、今後こういったジョイントゼミを進めていくにあたって、継続的に進めることが良いのかどうか、進めるにあたってはどのような問題点があるのかといったような今後の可能性についてのご意見を伺いたいというのが第二点、第三点はジョイントゼミに限定しないで、今後の国際的な研究教育のあり方についてのご意見を伺いたいと思います。ジョイントゼミについては、2005年度、昨年度に韓国の同徳女子大学、淑明女子大学、カレル大学と実施いたしました。それから今年度は北京日本学研究中心、台湾大学と実施いたしまして、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院と来年の一月に実施する予定で現在調整を進めております。

まず、ジョイントゼミについてのご感想をお聞かせ頂きたいのですが、実施した順で大変恐縮ですが、李先生からお願いいたします。

李：おはようございます。「ジョイント」という言葉は連携をとる、ネットワークということですが、ジョイントのレベルにも様々なレベルがあると思うんですね。まず日本学という学問の教育上、学際性という点で日本学そのものがジョイントとして成立せざるを得ない、そういう領域的ジョイントができたこと。それが一つと、また、今回国際的なジョイントはうまくとれたと思うのですが、ただ国際的レベルだけではなくて、学内における、これはお茶の水女子大学の中におけるジョイントができた。それからいわゆる大学と学会とのジョイントもできなくもない。そういう様々なレベルのジョイントがあったと思うのですが、今回の焦点は日本学と日本語教育との領域的ジョイントがあったと思うんですね。それは前回もお茶の水女子大学で試みていた、私の研究でもありますが、私は個人的に日本学と日本語教育を結び付けるようなそういう総合的日本語教育を目指していますので、私としては非常に望ましいと思っています。

もうちょっと欲を言えば、日本語教育と日本学が別々のセクションになる方法を振り返り、もうちょっと中身をお互いに関係を持たせるような、「ジョイント」ができるような領域的ジョイントもあればもっと良かったんじゃないかと思っています。それからこのジョイントゼミにおいては、いろんな国の先生たちの専攻の違いが影響すると思うのですが、やはりその関心事にはかなりバラエティーがあり、このジョイントの効果というのは、刺激になったんだろうと思います。もう一つは、関心が広まるということです。情報を共有する。そういった意味で、二つの効果は大きいと思います。このジョイントの今回の参加者を見ると、国の数に比べて参加者がもうちょっとあっても良かったんじゃないかなと思うのですが。やっぱりこう院生たちがもっと活発に質問したり参加したりすれば良かったと思うんですけども。PR、呼びかけがもう少しあっても良かったんじゃないかと思っています。

小風：ありがとうございました。日本語教育と日本学のジョイントが重要だということ。今後日本学という枠組みの中で、日本学をどう充実していくかというのは非常に大きな問題だと思います。実際、同徳で実施された時の学生さんたちの反応はいかがだったのでしょうか。

李：同徳の院生たちは、お茶大、立教大学、昭和女子大とジョイント経験は割合豊かなものです。なので、かなり慣れていました。出会いを非常に楽しんでいました。そういった意味では、やはり院生を生き生きさせる、非常にプラスな企画だったと思います。これからもできるだけジョイントの機会を増やしていきたいと思っています。また去年からは北京日本学研究センターとも近くなりましたので、日本以外とのジョイントの域を広めていきたいと思っています。

小風：ありがとうございました。それでは一通りご意見を伺うことにして、趙先生お願いします。

趙：はい、みなさんおはようございます。台湾大学の趙と申します。今年、院生とのゼミを行いました。これは台湾大学にとって初めてのことで、院生にとってはもちろん非常に良かったと思います。ただ今度のジョイントゼミのテーマはほとんど文学中心ですから、最初は文学中心のゼミだと思いましたが、その後そういうような目的ではなく、文学の他にやはり日本語学を含めての形で参加した方が良いと言われました。昨日は、結局一人の日本語学の発表者が参加しました。李先生がおっしゃったように、ジョイントゼミを実施する場合は、やはり専門で別々にしてもいいんですけども、やはりジョイントゼミという名前のもとで、むしろ日本語学、日本学、あるいは日本文化に共通した内容を取り出してやった方がいいかと思います。もう一つは反省点についてですが、時間的に2日間くらいというのは短いと思います。都合がよろしければ5日間くらいでもいいと思いますけれども、大体1週間くらいでしょうか。例えば月曜日から金曜日というような形にしてですね。そうしないと強行スケジュールみたいになって、現地到着後すぐにゼミに入るというようなことになってしまうと思います。一応これで。

小風：ありがとうございました。スケジュールの点は大変大きな問題だろうと、実施してみて痛感しましたけれども、その点もまた後でお話を頂ければと思います。

朴：私はジョイントゼミは初めて参加したのですが、最初スケジュールを頂いた時には、自分は自分の発表だけやって帰ると思っていたのですが、これを見たら全部参加しないといけないということで…。

私は今の趙先生のご意見とは逆で、むしろもっと短くした方がいいと思います。なぜかという、日本学というのは範囲が広すぎるんですね。だからまず日本学の定義をどうするかという問題があると思います。その定義は専攻によって違うかもしれないし、自分の関心分野がそれぞれ違うから、自分の専攻と全然違うことだったら聞いても分からないということもある。そういう時にどうするか、どういう風に分けてやるかというのは、問題になると思います。

一つ良い点としては、研究と教育を並行してやるというのが良いと思います。お互いに刺激し合う、先生も学生も刺激があるというのが良い。普通、学会で私たちは研究の発表だけをやります。まあそれ自体も教育効果はあるとは思いますが、学生たちの発表を聞いてまたそれにコメントをしたりして指導するというのを、こういう場を通じてできるというのは効果があると思います。とにかくこの日本学の大きなテーマは「対話と深化」ですね。でもそれぞれ違う専攻をもつ先生たちが集まって、どういう風に日本学を深化させるのかというのは本当に難しい問題だと思います。専攻を分けてやるか、あるいは専攻を越えてお互いに対話をするのかという問題は、もうちょっと議論してほしいとおもいます。とりあえず。

小風：ありがとうございました。その点は非常に大きな問題で、さっき李先生からもご提案頂いた問題であると思います。続いて郭先生お願いいたします。

郭：おはようございます。すでに3人の先生からいろいろお話があったと思いますが、私も今回は実は初めてでした。もちろん前回、北京日本学教育センターで日本語教育をテーマにしたジョイントゼミはありました。しかし当時は、私は専門がちよっと違いましたので直接参加することはできませんでした。けれども今回来て、事前にいろいろ情報を得ましてですね、確かにこのジョイントゼミは、今の国際情勢に合わせた、グローバルバリエーションにマッチしたような発想だということが、まず将来的に学生を養成する場合は、非常に大きな

視点である。まずこの点を大変重要だという風に私は捉えております。

その中身とか効果とかに対していろいろ評価はあると思いますが、私の方から見れば、学生にとって非常に刺激的な、とくにうちの大学は外国人の専門家は日本人を始めいろんな方が見えるんですけども、直接学生に対して指導するというようなことは、今までほとんどやってきませんでした。前回うちの大学で協力した日本語教育が初めての経験で、今回は2度目ということで、非常に素晴らしいということを感じております。もちろん日本語教育、そして日本学という大きな枠の中で、いかに専門に特化したものをやるか、やはりそれは課題という風に感じております。

もう一つ感じたのはですね、学生に対する刺激は良いですけども、ごくわずかで限られている学生しかいないということです。うちのほうから一名、お茶大もそうですけれども、むしろお茶大の学生には広く受けて頂きたい。今後いかに成果を拡大して、共通の多くの学生にそういったものを共有させることができるかが課題だと思っております。

もう一つ思いついたことなのですけども、我々は今学問をやっているわけなんですね。勉強、研究をやる、と。それを乗り越えた形で学生同士の懇親、友好関係、これをいかに強化していくのか、これはむしろ勉強、研究の前提となるようなものだと思います。ですから懇親会も一つのいい形式であり、お互いに話をすることによって友情が深まりますけれども、それ以外に例えば韓国なり中国なりいろんな国で、学生の懇親会のあとにカラオケ大会とか、そういういろんな勉強以外のことです。こういうものが好きだよとか話をしながら、お互い友達になって、そして研究者になって交流が深まっていくんじゃないかなと思います。余計なことばかり言ってしまうて申し訳ありません。以上です。

小風：ありがとうございました。北京日本学研究センターとは今年9月に実施したのですけれども、それにはどのような感想をお持ちですか。

郭：その時の学生の方からの感想は、大変素晴らしい、刺激を受けているということでした。

小風：もう一度来年明けにやりますよね。

郭：来年1月の5日から10日まで、うちの大学で協力させていただきますので、その時はとくに日本文学と文化ですね。我々の方もいろいろ準備をしております。うちの大学から四名報告することになっていて、その時他の学生も1年生から3年生までみんな聴講することになっているので、今回は広くみんな刺激を受けられるのではないかなと思います。

小風：ありがとうございました。ではラブス先生お願いします。

ラブス：カレル大学のラブスと申します。おはようございます。今年の3月に小風先生と何人かの学生が日本からいらして、カレル大学で日本学における最初のジョイントゼミを実施しました。今回はこちらに来ました。このような大規模な国際的なジョイントゼミは初めてであります。残念ながらチェコではそういうジョイントゼミの伝統が全くないので、参加できることを本当に嬉しく思います。

で、その効果ですが、非常に刺激的で良かったと思います。また、やはりさっき先生方がおっしゃったように、僕らの専攻はだいぶ違う場合がありますね。なので事前に他の専門の情報が得られれば、自分の専門外のことにも少しでもコメントできるかと思います。研究自体が細分化していて、だんだんやっぱり遠い分野のことはますます分かりにくくなっていますので、そうした方が効果は上げられるんじゃないかと思います。以上です。

小風：ありがとうございました。SOASとは来年ということですが、昨日参加されたご感想をお願いします。

スクリーチ：小風先生がおっしゃったように、うちのロンドン大学のSOASについては・・・名前を少し説明した方がいいかもかもしれませんね。これまで決まった日本語訳名がありませんでしたけれども、最近「アジア・アフ

リカ研究院』となりました。誰がつくったかは分かりませんが、英語では **School of Oriental and African Studies** といいます。というのは、ロンドン大学は非常に大きな大学で、その中にアジア・アフリカ研究がある。変な感覚ですね、大英帝国の昔の考えですけども、一つの研究所、カレッジの中に欧米、南米以外の研究が全部そこに絞られて入っています。ちょっと悪くいえば隔離されていますけれども、良くいえば本当にアジアとアフリカだけで、すなわちそれぞれの研究者は自分の研究対象をメインにすることができるんですね。何でも比較するというのではなくて。例えば僕は美術史です。いろんな他の大学で美術史をやる人は、まず最初はオランダ美術史とかをやって、そのあと一つの選択として日本や中国とかについてやるんですね。しかし、うちの大学の美術史学部では、西洋美術史が全くありません。同じように文学部で英語、フランス語、ドイツ語は全くありません。アジアとアフリカだけです。非常に特別なんですね。若い生徒が高校を出て大学に入る時に、卒業するまで一切西洋文化を勉強しないのです。アジア・アフリカのみです。すみません、余計な話ですけれども、**SOAS** とは一体何かということです。

小風先生がおっしゃったようにまだジョイントゼミは実施していないのですが、来年の1月にロンドンにお茶大の先生方と学生たちを呼んで、ジョイントゼミを行うことになりました。大変楽しみにしています。恐らく10名以上この大学から来て、うちの大学からその倍くらい参加するということなんですけれども。ちょっとだけ心配なのは、うちの学生がどのくらい日本語を話せるかということなんですけれども、まあなんとかかなと思います。以上です。どうぞよろしくお願いします。

小風：ありがとうございました。森山先生お願いします。

森山：お茶大側として発表させていただきます。今回のこの企画は「魅力ある大学院教育イニシアティブ」ということで、教育をサポートするという側面がかなり重視されています。それで、昨年度来いろいろなイベントを、イニシアティブと比較文学研究センターとが共同で展開してきたわけですが、最初は日本語教育に関するジョイントゼミ、3月にフランスの二大学との国際ジョイントシンポジウム等々から始まり、9月には北京日本学研究センターとジョイントを行いました。イニシアティブということで、試みという側面もあるかと思いますけれども、では今後これをいかに定着させるのかという問題が残ってきますし、これは今日の一つの大きなテーマであると思います。今回は予算的な援助を受けながらなんとか成功できた。しかし、今後必ずしも予算が保障されるとは限らない。その中で継続することを考えていけば、やはり学生が自主的に参加する体制を考えざるを得ない。どうしたらいいのかということ考えた時に、例えばこれは学部の話なんですけど、同徳と本学との間で日本語教育に関するセミナーをこれまで3回行ってきて、最初は単位無しの自主的な参加の募集をかけて実施したのですが、グローバル文化学環というのができ、授業として開催できるようになりました。そうすると、学生の自主的な参加、姿勢が変わってきたんですね。ですから、この企画が単なる研究発表でなく、学会発表でもない、本当に教育という側面があることを考え、その辺を何とか工夫する。例えば集中講義にして単位がもらえるようにする方法もあるわけですから、何とかそういう形で、たとえ海外であり若干の費用を出したとしても学生が参加したいという、そういう体制を構築していけないかと思います。

あとは、先ほどちょっと話に出ていたんですが、学際性を求める側面と専門性を求める側面とは、やはり絶えず私たち研究者の間では葛藤する部分かと思っています。私の場合は韓国に長かったのですが、韓国の場合、韓国日本学会という日本学全般の学会というものがあります。そこでは専門性を求めつつ、全体が一つのネットワークのように学際性も求める。当時、李先生がその会長でいらしたので、そういった学会でのご苦労というか、達成してみているいろいろなご経験というものもおありだと思います。そういったものも生かしながらいかに専門性と学際性、しかもここでは国際性というものも求めていかなければならないので、例えば全体会と分科会という風に分けて両立するとか、そういった方法を模索していければと思っています。

小風：ありがとうございました。私は司会者のような役をしておりますけれども、実はジョイントゼミの実施については担当者でもありますので、私も実施してみたいの感想を述べさせていただきます。

言いだしっぺということでジョイントゼミという企画を立てたのですが、最初の頃は全然理解されなくて、何を言ってるんだ、学生を連れて行って一体何をやるんだと、ずいぶん言われました。要するに、国際交流、学

術交流が中心のすなわち研究交流、教員同士の交流というのが前提にあって、何でそこに学生を連れていくんだと言われたわけです。しかし、これからは学生同士がお互いに国、地域、あるいは大学を越えて共通の場で研究を進めていく、そういう体制をとることが今後の時代において非常に重要なんだ。大学の中で閉じていてはダメだということをこちらもずいぶん言いました。そういうことをやっている大学というのはあったとしても非常に少ないし、その場合のパートナーも限られている。そういう二つの枠をどこかでとりはらってしまいたいという思いがありました。その場合研究分野としては、ご指摘の通り、専門性と学際性という問題、日本学というのはい体何なんだ、一つのくくりの中で研究領域として存在しうるのかという問題。深化させる、つまり専門性を追求すると難しくなってくる専門性と学際性のバランス、これをどうとるのか。これは最初から分かっていたんですが、難しい問題だと思います。

もう一つ、やはりジョイントゼミという場合の一番の問題は、学生のモチベーションだと思うんですね。参加する学生が受身で参加していれば結局だめなわけで、自分たちが今後のキャリアを蓄積していく上で、非常に重要な得がたいチャンスだという風に捉えてくれればと思っていたのですが、その点のご指摘があった通り、まだ足りないのではと思います。ただこれは初回だということもありますので、そういう意味でいうとまだまだ私が言っただけではジョイントゼミが何なのかに参加する学生さんもよく分かっていなかったということだと思います。これを継続していくことで初めて、ジョイントゼミの深化というものが発揮されてくるだろうと思います。

そのためにはどうしたらいいのかということで、今回こういう場を設けさせて頂いたので、引き続きご意見を伺いたいと思います。一つ大きなポイントはやはり教育という視点が入っているという点、それはしかも国際的なパートナーと一緒にそれを進めていく。しかもそのパートナーは一つではなくて、複数の大学との間でパートナーシップを実現していくというところ、このメリットは非常に大きいと思いますね。それがどのように生かせるかということが一番の課題であり可能性であると思います。実務的な面でいうといろんな問題があるとは思いますが、最大の問題はスケジュールということで、今年淑明女子大学とは3日間前後やって、最初の2日間は午前から午後までびっしり組んでしましまして、ちょっとやりすぎたという失敗も経験しました。スケジュールというのは非常に重要なことです。ただ、ゼミをやるということだけが必要なのではなくて、カラオケ大会をすることも必要でしょうし市内観光をすることも必要だと思います。財産をつくるという意味で。もう少しフレキシブルにゼミの前後はやった方がいいという気はしています。

今いくつかポイントが出てきたと思うのですが、しばらく十分ほどその点を議論して、その後にせっかくご参加頂いた学生さんからもご感想なりご意見なりを聞かせて頂きたいと思います。まず、先ほどから、日本学というくくりで、専門性と学際性のバランスをどのようにとっていくかということが非常に大きな問題だと思うのですが、この点についていかがでしょうか。実施してみて、何かその点についてご意見ございますか。

李：私はそもそも意味論をやっているし、認知理論的に言葉の意味を解かそうとする場合、やはり言語の概念だけでは限界があります。その意味の中身を探ってみますと、様々なこと含んでいまして文学はもちろん、歴史、社会、民俗、教育、思想など様々な分野の幅広い理解無しではとても意味を突きとめることはできない。結局言語を勉強する、学ぶということはその周辺の関連領域全てに絡んでくる。それこそ総合性をもたざるを得ない。ただ、時間の問題があるから実際はかなり難しいと思うんですが。そこで、総合的日本語教育として捉えたかったんです。

韓国の場合、日本学会という会員が1800人くらいの学会があるのですが、そこには九つの専門分野がありまして、文学は文学、歴史は歴史、そういう風にそれぞれの専門分野の研究活動もやりながら、そのまたネットワークということで一緒に同じテーマ、同じ主体で研究したり、また学会のように研究発表をしたりというそういう仕組みをもっています。実際会費は一人分しか払わずに九つの学会に出席できるという、これはかなり得なものだと思います。19世紀、20世紀の大学の仕組みは、専門分野だけをやっていけば学問だというそういう傾向に慣れていました。日本だと1970年代から開かれた大学ということでどこの領域でも広く学べるという教育制度の改革があって、今はだいぶ一般化していると思うのですが、まさに今の時代の学問は学際的であり、それはもう主流ではないかと思います。そういった意味でも、日本学も日本語教育の分野だけで良いんだという風に思わないで、教育そのものを改革させようとするべきです。

ただ、どういう風に混ぜるか、その混ぜ方が問題だと思うのです。ただ一緒に入れておくだけでは問題だと思います。できるだけ一つの大きなテーマを掲げ、そのテーマに合わせてそれぞれの分野からアプローチするという試みが必要だと思います。

小風：ありがとうございました。朴先生お願いします。

朴：今、李先生がおっしゃったように、韓国日本学会というのが日本学の学会としては、一番規模が大きいものだと思います。分科会が九つもあります。私も実際参加したことはありますが、問題はですね、参加する研究者、学生が多い割に、議論の時間が短いんですよ。というのは、1日で全部やろうとしたら、申込みがあった人たちを全部発表させる場合には、それぞれの時間は短くしないと消化できない。そうしてしまうと司会者は時間通りにやることばかりに気を遣ってしまう。その議論をまとめて最終的にどういう整理をするかというのをこれからは少しずつやっていかないと、日本学の発展というのが形だけになってしまうという恐れを感じました。

小風：学際性という点についてはいかがですか。

朴：学際性については、自分の個人的な経験からいえば、85年から87年まで筑波大学にいましたから、さっき李先生がおっしゃいましたように、非常に学際性というものを全面に出したそういう頃がありまして、私はその時地域研究科にいましたから、周りにいろんな専攻をもつ学生がいました。いろんな話を聞いたり、自分が全然気づいていないところを気づかされたり、そういうところでは良い点があるかとは思いますが、その欠点としてはやはり深さですね。自分の研究を深めていく上では、広さはあっても深さはちょっと弱いというのが学際性の一つの問題点だという感じがあります。

小風：そうですね。台湾大学では…。

趙：台湾大学の場合は学科の性質上、日本語学、日本語教育、日本文学、日本文化など一緒に扱っています。今まで大きな学会が二つありまして、一つは台湾日本語文学会、もう一つは台湾日本語教育学会です。内容的にはほとんど同じです。大体1人で二つの学会に出席します。ただ、日本語文学会の場合は月1回の勉強会があります。また、二つの学会ともに年に一度シンポジウムがありまして、大体三つのセッションに分けてやります。この形で、参加者、例えば学生は自分の興味、関心に合わせて参加します。私は、考え方は李先生と同じです。例えば一つのテーマを出して、文学の分野、日本語学、あるいは日本文学の分野から追求すればいいと思います。例えば女性をテーマにした場合、女性文学、女性の言葉、女性の着る物などから追求すれば共通点も見つかるのではないかと思います。この考え方は恐らく世界文学に通じるところがあると思います。私は三、四年前に台湾の世界文学の学会に参加していましたが、そこでは英語以外の九つの言語を用いて、例えば環境保護のテーマでは全ての国が環境に対する問題を取り出してくる。このようにすれば焦点が定まっていくと思います。

小風：ありがとうございました。学際性の場合は、研究の理論というよりもその対象のところで論点が交錯していると思います。そういう意味で日本学というのは日本という対象をいろいろな方面からどのように切り込んでいくか、その中で交錯するおもしろさというのが追求できるのかなと今お話を聞いていて思いました。

郭：私が今現在おります日本学研究センターでも同じような悩みを抱えています。要するに三つの大きな専攻がありまして、日本語教育、文化・文学、社会・経済です。その中に細分化すると六つのコースがあるというような状況で、いかにこれらを融合して日本学を勉強していくのか、あるいは研究していくのか。かなりお互いに衝突し合いながら、四苦八苦している状況なのです。

今小風先生がおっしゃいましたように、果たしてこれを学生がどういう風に考えていくのか、いろいろ我々も

課題として考えていますが、今考えるのは深みの問題、どの程度の深みをもってお互いに交流できるのか、また刺激を与え合うのか。もう一つは方向性の問題もあると思います。というのは、外の学生から見れば日本語教育、日本語の専門家から何を吸収できるかということが出てくると思うんですね。あるいは異文化コミュニケーションとかの面ではむしろ文化などをどのように吸収できるのかというのがあると思います。私は文化の専門家ですけれども、昨日の発表をちょっとだけ聞いてもどうもさっぱり分からない部分もあるし、大変申し訳ないですけれどもコメントのできないような状況もあるわけです。ただ、教育、文化、思想などの人文学をやっているみなさんにとっては、方法論としてこの関係は相通ずるところもあると思います。この点ではお互い刺激を与え合うことは可能ではないかなと思います。

ですから、今回このジョイントゼミの効果をさらに確かめるためには、私の一つの提案ですけれども、できれば各大学で学生や先生を対象にアンケートをつくってみてはどうかと思います。要するに方向性、方法論、深みなどの面でどういう成果あるいは収穫があったのか。このフォローアップを毎年積み重ねていく必要があるのではないかと思います。とりあえず以上です。

小風：ありがとうございます。

ラブス：日本学の学際性について申し上げますと、それぞれの大学のカリキュラムとの関係が強く関わってくると思います。カレル大学について簡単に申し上げますと、まずバACHEラーコースを発足したばかりで、これからスタートするために大学院生と準備をして文部省に認定してもらわなければいけないんです。四つの専攻があって、日本社会、日本文学、日本語学、日本の歴史です。で、博士論文とか卒業論文などを書くために学生にまず問題意識をつくらせなければならないのです。

小風：ありがとうございました。今のご提案は非常におもしろいと思います。SOAS の場合は別だと思いますけれど、他の大学の場合は非常に広い対象の中で限られた教育において、いかに学際性を重視するべきかというのが非常に大きな問題なのではないかと思います。お茶大も必ずしも十分な研究者が集まっているわけではありませんので、多かれ少なかれ似たような問題を教育あるいは学生指導の中に抱えているのではないかと思います。そういう場合にコンソーシアムを立ち上げるということは、ある意味で国際協力の中で今いったような限界や問題点を乗り越えていく可能性があるんだということだと思います。SOAS はいかがですか。

スクリーチ：そうですね、専門性と学際性についてなんですけれども、まだ日本学は西洋では比較的規模が小さいですね。だから日本に対して知りたいことがあるとか、ここはよく理解できないとかあると、私にすぐ電話が来て「これ説明してください」と言われるんですね。国立大学ですので門外の人に対しても一応責任がありますから、聞かれたら何とか返事をしたいのですけれども、僕は、江戸時代の美術史ですから、現代の政治制度とかを聞かれたら困りますね。だけど問題が大きくなればなるほど専門が出てくるのは当然ですし、あるいは郭先生がさっきおっしゃったように自分が専門を深くやればやるほど他の人のことは聞きたくなるんですね。これは自分には関係ないなどと思ってしまって。だから、良いと悪いと両方ありますが、専門性が出るのはある意味で当然のことだと思いますね。

ただ、うちの大学の場合で、ちょっとずれるかもしれませんが、現代の文学と古代の文学はけっこうはっきり分かれていますね。古文を義務教育に入れるかどうかということです。今のところ古文を勉強しないと日本学部を卒業できませんけど・・・違いますか。(会場：「最近変わりました。」) 最近変わりましたか。では僕はそれに反対します。

小風：SOAS は学際性という点ではどうなのですか。学生の興味、関心についてどんな風にご感想をお持ちですか。

スクリーチ：うちの大学の構造は、まず言葉がメインですね。どんな国が自分の研究対象でも言語をマスターしないと専門に入れませんから、一番優秀な学生、あるいは一番遠くまで行きたい学生が日本学部に入ります。ただし、そこまで研究しなくてもいい、ただちょっと卒業するまでに勉強したいという学生なら、美術史学、

歴史学、経済学などに入ります。そういう学部に入れば言語は勉強しなくていいんです。全部英語でやります。全部英語でやれば当然に専門家にはなれませんが、日本学というのは地方学で、地方学というのは根本的に学際的だと思います。日本学なら当然広い意味で日本のことを勉強しますからね。時代区分はあるでしょうけれども。例えば僕は江戸をやっていますから、鎌倉はやりませんし明治はやりませんけれども、江戸の中で美術史は興味ない、文学は興味ない、幕府政治は興味ないとかじゃなくて、自分が選んだ時代の中でなるべく幅広く研究をした方がいいと思います。

小風：ありがとうございました。李先生。

李：今スクリーチさんから出た通り、海外の大学で日本語を教える日本語コースというのは基本的に学際的なんですね。中国でも韓国でも台湾でも、多分イギリスもチェコも同じではないかと思うのですが。韓国の例を挙げますと、五割くらいは語学と教育、三割は文学、あと二割近くは日本学です。学習者は基本的には日本学を学際的に研究しています。ただ専門性はあると思うんですけれども。ただし、それを教えている先生たちも結局は学会をつくっていて、その中で見てみますと非常に学際性に富んでいる。

ですので、海外の日本学はすでに全て学際化しているんですよ。しかし日本の中ではそうではない。これから日本の中でも学際性を成立させること、それによって海外とのジョイントはかなり生まれやすくなると思います。だからこれからの私たちのやるべきことは、正直に言いますと、語学・文学の学習者が余りにも多すぎて、日本学が少ない。もう少し日本学者の割合を三割近くまで伸ばしたい。そうすると、言語が三割、文学が三割、日本学が三割となって、ちょうど日本を理解できるように学習者が集まって理想的だと思います。ただ、だんだん日本学の方がそのシェアを広げている傾向にありますので、近い将来それは実行できると思います。

小風：学生もかなり幅広い関心を日本に対して持っていて、だからこそあまり専門性の強い学問ではなく、日本学専攻を選んでいるという要素もあるのではないかと、海外の学生さんと付き合ってみるとそのような感じを受けます。とくに我々から見ると非常に幅広い関心をもっていらっしゃって、それに応えていくのは大変なことだなという風に思っております。

今、お茶大の話が、というか日本の話が出ていますけれども、日本で現在日本学ということをやっている大学や研究は貴重です。いくつかありますけれども、大学機関では、首都圏ですと立教大学日本学研究所、法政大学の研究センター、実際に移動しているのはそれくらいですかね。ただ、現実問題として学生をそういうネットワークの中で育てようとして、少なくともそれを継続してやるのは難しい。立教は学生がおりませんし、法政は研究中心で進めているようですので、学生を対象にして考えているのは本学であります。

その中でネットワークが薄いというご批判は数年前から受けているわけですが、確かにそれほど海外の日本学研究組織に比べればネットワークは少ないかもしれません。でもだんだんお互いの研究状況を知りながら協力をしていこうという体制が出てきているのではないかと思います。現実問題として森山先生とこうして隣同士で座っていること自体、お茶大でネットワークができつつあるということの証明ではないかと思います。同じ日本学専攻というところにいて、日本学というものを分かち合っていきたいという同士がだんだん増えてきているのではないかと思います。それがなければもちろん今回のようなコンソーシアムを実現することはできないので。

ただそれは日本で努力した結果できたのではなくて、逆に海外の日本学研究組織などと合意を進めていく中で、日本にも日本学という枠組みが必要なんだというのが、やっと共通認識として出てきたのではないかと思います。ですから、本当の意味での日本学、学際的な日本学を研究したり教育したりするそういう体制はこれからできていくのではないかと思います。森山先生いかがですか。

森山：そうあってほしいと思いますし、理想と現実というのは何につけそれをいかに縮めるかというのが重要だと思います。今回私は二つのタイプのジョイントを実施しました。同徳との間ではテーマを一つ決めて、つまり狭く深くではない、学際性を求めやすいテーマを決めてそこに集うというやり方、もう一つは北京日本学研究所センターとのジョイントのように日本語学の研究者と日本語教育学の研究者が一つの教室に集まって発表す

るというやり方。隣接領域ですと比較的得るものが多いですから。そういった二つのタイプというのはいいと感じました。今回、昨日行われた日本語学の高崎先生を中心としたグループと日本語教育学とが一緒にやる中で、考えてみればこういう場というのはお茶大にあまり無かったということを改めて感じまして、そういったところから始めて、また時々こういう形で全体が集まるといった工夫をしていけばいいのではないかと思います。

小風：ありがとうございました。では時間がありませんけれども、参加して頂いている方からご意見・ご感想頂きたいと思います。実際ジョイントゼミに参加した方もいると思うのですが、その体験を語るというのもいいですし、今回話を聞いた感想でもいいのですがどうでしょう。だから、積極的に参加しなければだめだという話なのですから…どうでしょうか。はい、どうぞ。お願いします。

会場（1）：おはようございます。こういうようなゼミは学生側からの関心が非常に重要なポイントになると思うんですけど、どういう風にして学生に関心を持たせるか。一つの私の考えは、事前準備段階からの情報共有が必要じゃないかなと思いました。今回のゼミの場合もそうだったのですが、どういう趣旨があってどういう風に行われていくのかについて、もっと参加者同士の事前準備段階からの情報共有の一つの法案として、ネット上での自分の紹介とか発表内容についての簡略的な紹介とか、その内容を事前からちょっとだけでも共有していればこういうゼミに参加して発表を聞く学生もすごく活発的に参加できるんじゃないかなと思いました。

小風：ありがとうございました。こういうゼミがあるということ自体についてはどういうお考えですか。今後続けていくかどうかということ。

会場（1）：私は一応昨日発表しましたので発表者として先生から情報をもらっているんですけど、前からこういうゼミがあるということは聞いておりましたが、でも詳しく分かったのは本当に直前だったと思いますので、どの方がどういう内容を発表するかまではよく分かっていません。

小風：いや、参加してみて良かったですか。刺激になりましたか。それともこういうゼミはもう要らないと思いましたか。

会場（1）：私は同徳で修士課程から博士課程まで勉強していましたので、海外からのいろんな学生たちとのゼミに慣れてはいました。自分の関心のある分野の学生との出会いはもちろんあったと思うのですが、かえって全く自分が知らない分野からの発表を聞くことはすごく勉強になったのではないかなと思います。やはり知らない方に理解してもらおうということも一つの研究としての課題だと思いますので、その意味では、違う分野の人と接する機会が得られるということは非常に意義があることだと思いますので、肯定的な考えを持っています。

小風：ありがとうございました。他にいかがでしょう。お願いします。

会場（2）：この場所では話すことはやめようと思っていたのですが、私は今年の2月もうちの大学でのジョイントゼミに参加しました。その時もけっこういろいろ勉強になったと思ったのですが、もうちょっと私は共通のテーマがあったらいいと思いました。みんないろいろな分野で勉強しているので、それをもうちょっと深くするためには共通のテーマをもって、例えば女性なら女性の問題だとか、そういうことがあったらもう少し深い勉強になるのではないかなと思っています。また、大学院生の交流の問題なんですけれども、今回は全然交流できなかったと思っています。でもこんな機会があって、もうちょっと大勢の大学院生の方から発表を聞けたら良い機会になると思っています。機会自体はいいと思います。

会場（3）：初めまして。今回このコンソーシアムというのがあるのは初めて聞きました。私の情報不足だと思うんですけど。今回いろんな先生方の話を聞いて国別にどういう研究指導がなされているのかというのを聞

いてすごくいいなと思いました。あといろんな国の状況というのも聞かせて頂いてすごい助かったと思うんですけども、私の学校ではこういうのは多分無いと思うんですね。もっとこういう機会があれば、もっと広げたい方がいんじゃないかなと考えております。ここで一つ素朴な疑問なんですけれども、この集まりというのは発表をなさるということだったんですけども、昨日はまだ私も来てなかったのだから分らないのですが、大学院生たちの発表をして集まった先生方に指導を受けるということで、学会とはどのような異なりがあるのかというのを聞きたいんですけども。

小風：学会ではありません。あくまでもゼミの共同指導ということでして、成果としてまとめたものを発表してもらってそれに対して学術研究的な意見を交換するというのではなくて、今、研究途上の学生さんたち、大学院生さんたちに、修士論文・博士論文を書いているという中で、自分の大学の教師以外の先生から、それから同じ年代で同じ勉強している学生から意見を聞き、交換するというのに、このジョイントゼミの一番のねらいがあるわけです。

さっきちょっと申し上げたのですが、大学それぞれが閉じたカリキュラムで今までやってきた。ところが、この日本学という対象は非常に幅が広いし、いろんな方法論で考えなければいけない。なかなか一つの大学の中ですべてをまかなうことは難しいし、同じ研究の仲間を同じ年代で見つけるというのも難しい。そういうことを越えていくためには国際的な改革を推進していく必要があるだろうということで、このゼミを考えたのです。ですから、人数が非常に少ないという、各大学一人しか来れなかったという問題点はあるわけですが、持ち回りで開催するなどということでもそういった問題は実務的には解決していくことはできると思います。そういう場が必要だと認識して、こういうジョイントゼミを今後継続していこうという風に合意が得られるのであれば、今言ったような問題点というのはかなり解決可能なんじゃないかと思っています。

そういう意味で、このジョイントゼミの主体はあくまでも学生なんです。学生が研究を進めていく上でよりよい研究環境とよりよい仲間をつくってほしいということが一番の目的です。今回は初回だったので問題点はあったかもしれませんが。なので、あなたがおっしゃったような形の学術研究の場では決してないし、学会発表の場でもありません。それでよろしいでしょうか。

会場 (3)：ありがとうございました。

小風：他にいかがでしょうか。

会場 (和田)：私は小風先生の研究室博士課程の和田と申します。私はカレル大学で行われた合同ゼミに参加しました。参加をした経験を少しお話させて頂くと、良かったなと思うことは、第一にやはり私は海外の学生さんの前でお話するのは初めてでしたから、日本の学生さんの前でするのはやっぱりプレゼンテーションと仕方とか、どういう風に説明したらいいのかということに全然知らなかったの、行って見て経験してみて、あ、やっぱりそういうこともいろいろ考えていかなければいけないんだなということを考えさせられたというのが一点目。

二点目としては、私はちょうど戦間期の国際関係史を研究しておりますので、もちろん第一次世界大戦後というと、日本のヨーロッパ外交の中でチェコというのは射程に入ってくる。そういうのはやはり現地に行ってみて、なるほどチェコというのはこういうところだったのかということにすごく肌で感じる事ができて、あと学生さんとお話の中で、中央ヨーロッパの人々というのはこういう歴史があつていろんな考えがあつて…ということにすごく直接感じる事ができたというのはとても良い経験になりました。

で、帰ってきていろいろ考えて、こうすれば良かったかなと思った点については、やはり先ほどからご意見があったように、もうちょっと学生さんとかカレル大学の先生方と事前にコミュニケーションがとれていて、こういうようなテーマで話し合いますよなんていう情報交換ができていれば、もうちょっと議論を深めることができたんじゃないかなと思います。せっかくチェコまで行ったのに、議論の場でなかなかこっちが一方的に言うような感じになっちゃったんじゃないかということにすごく心に反省しております、そういうことができれば良かったかななんてことを考えております。以上です。

小風：他にいかかでしょう。では、時間もだいぶなくなってきましたので、今後またジョイントゼミをどうするかということを含めてですね、こういう場は意味がないということはないと思うんですが、これから研究者を育てていくために国際協力というのはどのように進められていくべきなのかということについて、一言ずつお願いします。

李：こういう国際交流、ジョイントの壁になるのは二つ挙げられると思うのですが、一つは財政問題、もう一つは閉ざされている心、マインドですね。マインドそのものはお互いに説得したり認識されることによって解決できると思うんですが、財政の問題はもうどうしようもない問題で、いつも日本で開催されるゼミに参加するのは本来の目的からはふさわしくない。それでいろんな方法がとれると思うのですが、今回みたいに日本の国の援助を受ける、そういうのももちろんいいんですが、それはしょっちゅう受けられるわけではない。もう一つ方法としては、政府機関でないいわゆる会社の助成を受けたり、小額でもいろいろな所から少しずつ集めてみたりというそういう方法もかなり役に立つと思います。また、もう一つ経費を最大限に減らす、学生の飛行機代は仕方がないですが、例えば向こうのホテルとかをホームステイにして泊まる費用を減らす。ホームステイをするとほとんどただで泊まれるというそういう方法もありますので。今まで私たちがとってきた方法としてはそれが一番良かったんじゃないかなと思います。それにプラスして少し助成金をいろいろな所から集められれば、毎回開催できるんじゃないかなと思います。これからはできるだけ日本のみならず韓国、中国、台湾、チェコ、イギリスでもジョイントゼミができればいいと思います。

趙：今年の10月頃、北京大学で日本語学科創立60周年のシンポジウムに参加しましたが、そこで、中国を中心に香港、台湾の三国で、ジョイントゼミを一つやったら良いのではと提案しました。でも日本語学、日本語教育学を含めて、「日本学」をやっている以上日本を抜いてはおかしいと思っています。日本語学をやっていく以上では、やはり出発点の拠点、日本についてほしい。話は戻って、もしこのような形で続けてやっていくとすれば、国立大くらいの院生を派遣してお茶の水大のゼミに参加させる可能性もあります。ただ、例えば四日間くらいの短期間で、ホテルではなくて、ジョイントをやる学生のために寮を提供して頂けるとありがたいと思います。

朴：私は、国際ジョイントゼミだけでなく国内ジョイントゼミも可能だと思いますね。私の経験から言えば、熱意が一番だと思いますね、一緒にやろうという。2年前ですかね、韓国外語大学と釜山のいろんな大学と共同で一度やったんですよ。そこで大学院生たちのプロポーザルをやったんですが、その時終わってからの懇親会の場で、院生たちが非常に喜んでですね、普段自分たちの学校で自分たちを教えている先生からだけでなく、他の先生たちからいろんな指摘を受けて、非常に新鮮な衝撃を受けて、だから毎年やりましょうとなりました。

でも先生たちは忙しくてやらないんですね。そういう風に熱意が足りないと続けていきにくいということがあります。もう一つは、日本学の場合は地域性があると思いますね。例えば欧米がもっている関心分野というものと、アジアが持っている関心分野、アジアの中でも中国、韓国、それぞれ関心は違う。そういうところをお互いに理解しながらやっていくことが一つの前提にならないといけないと思います。そのためにはお互いにそれぞれのカリキュラムの情報交換というものも必要じゃないかなと思います。

郭：先ほど先生方からいろいろご指摘がありました。財政の問題、マインドの問題、これは最重要な課題だと思います。また国際でなく国内のジョイントゼミをできるのではないかとご指摘もありましたけれども、確かに私もそう思います。うちの大学院でも文化コースに限って北京大学と時々やることにしようと、この間そういうご提案がありまして、ぜひ進めていきたい、合宿の形でやりましょうという合意ができております。来春には実現できそうだといいことでもあります。

もう一つ提案ですが、学生の教育に対してもっと過剰効果を増やすためには、学会とのコンビ、組み合わせは可能でしょうか。例えばうちの大学では1年に1回大きな学会があります。他の大学もいろいろ企画されていると思うのですが、それと組み合わせることによって、まずはシンポジウムなどを開いたりして、それ

に対して自分の研究はどうすれば良いかを問う、そして先生から指摘を受ける、そういうことが可能であればさらに成果が増えるのではないかと私は個人的に思います。以上です。

ラブス：カレル大学の参加の仕方を考えたら、地理的に非常に遠ざかっているし、予算の問題もありますけれども、多分実施するならば一番効果的なのは、学生を日本に送って、1ヶ月くらいの集中講義に参加させることだと思います。以上です。

スクリーチ：財政問題の話が出てきたので・・・今回はお茶大に全部出して頂いて大変ありがたいと思っています。日本研究者に対して日本に来るイメージはいかにも当然ありますね。だけど日本の方々が海外に行って、我々の日本研究のことは見てくれるのはやっぱり嬉しく思っています。ただ、こちら側で教えるものが本当にあるかどうかという・・・先ほど海外に行って外国人の前で発表するのが初めてで非常にいい経験だったとおっしゃいましたけれども、それは確かにそうだと思いますね。うちの日本学というのが日本人に何か教えることがあれば非常に嬉しく思っています。本当に何かあるかどうかはまだ分からないのですけれども。

森山：今まさにスクリーチ先生がおっしゃったことなのですが、日本学というと日本が教える側と考える場合が多いのですが、私の考えは逆でして、日本学研究こそがもう少し国際化する必要があると感じております。私の場合、海外に長くいたということもあって、どちらかというと外側から日本を見つめる視点というのが強いのですが、例えば留学生が日本で日本学を研究して国に帰るといった時にその研究の手法などがいろんな点で微妙なずれを起こしてしまっていて、日本では通用するかもしれないが、うちの国では通用しないんだよということもありえなくもない。

昔、小風先生とそういう話をしたこともあるんですが、ありえると思うんですね。3月にパリで国際シンポジウムを開いた際も、やはり私たちは日本研究というとか何かこちらが発信する側と考えるかもしれませんが、決してそうではなかったし、また北京でジョイントをやった際にもそういったことを感じました。そういった意味で、私は日本学をもうちょっと国際化すべきであるという考えの立場から、私は日本側が海外に出て行って学ぶべき点がたくさんあるし、別の言い方をすれば、若い研究者の時代からそういう経験をもってほしいと思っています。ですから決して一方向的ではないということを私は強く言いたいと思います。

そして、情熱というお話が朴先生からありましたが、こうした国際的なイベントを行うというのは、やはりすごく大変なんですね。先生としても忙しいから避けたいとかつらいとか、そういった気持ちになるわけです。だからほんとに教員の側が努力し、それを乗り越えてやる必要があるだと思います。やればすごく良かったという結果になるわけですから、そういった苦勞を惜しまないで情熱といったものを教員にしる学生にしる持っていく必要があると思います。あとはいろんな手段を講ずるということで、昨日のレセプションでもちょっと話しましたが、ビデオ会議システムなどを利用した遠隔での交流もできるわけですから、そのようなものは可能な限り利用することも考えています。

小風：長時間討論していただき、ありがとうございました。

今回のイニシアティブでのジョイントゼミについては、評価していただいたと考えております。今後も継続したいというご意見も多いと思いますので、財政的な問題はるかと思いますが、交流に関する情報交換を積極的におこない、もし今後各大学で類似の企画が実施されるときには、相互に参加を呼びかけるという努力を続ける、ということで意見の一致をみた、とまとめてよろしいでしょうか。

それでは、今後はお茶大の比較日本学研究センターがそのネットワークのまとめ役として働いていく、ということでご了承いただきたいと思います。

本日は、本当にありがとうございました。

以上